

氏名(本籍)	栗原明美(茨城県)			
学位の種類	博士(ヒューマン・ケア科学)			
学位記番号	博甲第5851号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	血液透析患者の身体・精神・行動特性の分析			
主査	筑波大学教授	保健学博士	宗像恒次	
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	橋本佐由理	
副査	筑波大学教授	医学博士	田宮菜奈子	
副査	筑波大学教授	博士(医学)	山縣邦弘	

論文の内容の要旨

(目的)

近年糖尿病を原疾患とする Hemodialysis Patients (以下 HD 患者) が急増しているが、非糖尿病慢性腎臓病を原疾患とする HD 患者にみられるような長期間の保存期を経て腎機能の廃絶を認め治療導入に至るケースとは異なり、心不全の悪化に伴い治療導入が決定されるため腎機能低下を指摘されてから比較的短期間で治療を開始するケースが多く、HD 患者の全体像が様変わりしてきている。本研究では、Chronic kidney disease (以下 CKD) に罹患し、HD に至った患者群の身体・精神・行動特性について、その経過を保存期にさかのぼって調査すること、またその際には、DM と非 DM という疾患別背景をもとに両者を比較し、HD 患者の現状を多角的に検討することで、彼らの自己管理行動に影響を与える要因を見出すとともに、問題を抱えやすい HD 患者の行動変容を促す為の効果的な介入法を見出すことを目的としている。

(研究課題 1)

(目的と方法)

①「CKD (非 HD)」と診断された非透析患者と一般有職成人の比較、②次の「CKD (非 DM)」患者の血液透析治療導入前後の比較、③また「CKD (DM)」患者の血液透析治療導入前後の比較、④「DM」患者と「非 DM」患者の血液透析治療導入前後の比較をおこなう。これらの多角的な比較によって、身体・精神・行動特性の有意差のある要因を明らかにして、それらの自己管理行動に影響を与える要因を見出すとともに、問題を抱えやすい HD 患者の行動変容を促す要因を明らかにする。

(結果と考察)

「CKD (非 HD)」に罹患している患者群の生活習慣の特徴は、統制群に比べると食品を選択する際、「健康」より「気分」や「親和性」を重視する有意な傾向にあり、食事療法の問題を抱えやすく、精神健康度は、「不安」や「抑うつ」が高い。他方、CKD (DM) 群について、HD 前と HD 導入後の患者群の比較をしたところ、DM 群は、HD を開始することで、カロリー制限が緩和となるため、食事療法負担感が軽減されるが、他の合併症の進行も相まり HD 群は ADL 低下が進行していることも考えられ、身体運動が低下し、動けないことが人間関係をより複雑にする。CKD 「DM 透析前」群と CKD 「非 DM 透析前」患者の比較では、CKD ・非

DM群より、CKD・DM群の方が、HDをおこなうことで生じる様々な問題について、より積極的に対応しているように見えるが、DM群は感情認知困難度が高いことが証明されていることから、過剰適応になる可能性も否めない。慢性疾患の中でもHD導入以前のCKD群は、DM、非DMに関係なく、過去の生活習慣や信条に問題を抱えていることが多い。本研究の結果からも、CKD群は一般成人と比較して「不安」や「抑うつ」が高く、食行動では、「健康」よりも「気分」や「親和性」を優先し、「人間関係」には気を配れないといった特性が認められた。このことは、彼らが慢性疾患に罹患した後、適切な生活指導を受けているにも関わらず、行動変容はおこっていないことを示していて、今後もそのまま病期が進行していく可能性が高いことが推測される。またHDが目前にせまると、疾患背景に関係なく患者群は似た心理行動様式をとる傾向にあるが、HDを開始することで再び身体・精神・行動上、特異性が明らかになることを示しているため、今後はHD患者群をより深く理解していくためには、可能な限り、多角的視点を用いたアセスメントの必要がある。

(研究課題2)

(目的と方法)

問題を抱えやすい血液透析患者への効果的な介入プログラムを検討するために、血液透析患者に対し、情動変容から行動変容を促す新世代の認知行動療法といわれるSATイメージ療法による介入をおこない、介入前後で臨床データ及び心理測定値の変化を評価し、問題を抱えやすい血液透析患者への介入プログラム効果を検証している。

(結果と考察)

DM・HD群に対して、行動変容を目的にSATイメージ療法による介入をおこなったところ、介入前に比べ「自己価値感」得点、「自己否定感」得点が改善し、自己イメージが有意に肯定的にあり、「問題解決型行動特性」得点が改善され、心理学的に「STAI」得点、「抑うつ」得点が改善し、生理学的にも、ストレスとの関連性が報告されている好中球及びリンパ球比率や「体重増加率」が有意に改善した。一般に自己イメージに本人の養育者イメージが影響を与えることが知られているが、良好な顔表情イメージ表象をもった本人のスピリチュアル・キーパーソン（実際にはいないきょうだいや親族）がいることを前提にして、これまでの成育イメージの変容をおこなうSATイメージ療法で、養育者への期待水準が低下し、否定的な養育者の顔表情イメージ表象が良好となり、自己否定感が低下し、自己価値感が改善し、自己イメージが肯定的になり、問題解決型行動も改善し、患者が自らの問題を直視することが可能になった影響が大きいと考える。SATイメージ療法は、スキルを磨くことで看護師も習得できるので臨床現場で応用できるため、患者のベツトサイドでの距離が最も近い看護師が積極的に活用していくことが望まれる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

人工透析者の自己管理行動の指導は臨床現場で大変困難であることが知られている。本研究では、透析導入前後、DM/非DMのCKDなど患者の多角的な比較によって、身体・精神・行動特性の有意差のある要因を明らかにして、それらの自己管理行動に影響を与える要因を見出すとともに、問題を抱えやすいHD患者の行動変容を促す要因を明らかにした。そして、それら身体・精神・行動特性の変容を通して、自己管理行動を効果的に促せる介入法としてのSATイメージ療法の結果を分析し、その効果をもたらした諸要因を量的、質的に明らかにした。本研究をベースにした論文は国内の糖尿病学会や透析学会の専門誌に発表し、専門学会での評価を得たものとする。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。